

## 巻頭の言葉

京都文教大学地域協働研究教育センター長 松田 美枝

京都文教大学が平成 26 年に文部科学省「地（知）の拠点整備（大学 COC）事業」に採択され、地域志向を謳って教育・研究・社会貢献の三位一体改革に取り組み始めてから、早 10 数年が経つ。「地（知）の拠点整備（大学 COC）事業」の補助金は終了しても、それを契機としてなされてきた取り組みは、現在も走り続けている。

教育においては、「地域入門」や「地域インターンシップ」などの科目が設けられ、地域について学ぶ・地域に出向いて学ぶスタイルの教育が定着してきている。また、「プロジェクト科目」やその他の地域志向の科目においても、課題を見つけて介入方法を練り、実際に解決に向けて取り組む活動がなされている。筆者の専門領域を例に挙げると、児童虐待や依存症、自殺などの課題に、学生たち自身ができることを考え、取り組みながら、課題についての理解を深めるとともに周囲に働きかけ、さらに将来に向けて活かすことに繋がっている。長年にわたり講義科目で扱ってきたテーマであっても、受動的に聴くのと実際に活動に取り組むのとは、物事の理解や「自分事化」の程度が異なってくる。そのような仕掛けづくりをできるかどうか、これからの教育には問われているのである。

研究においては、今年度も地域志向・ともいき研究に 19 件の応募があった。多文化共生や観光・まちづくり、中小企業の健康経営、親子の居場所づくりや学習支援、若者の探求学習や自発的運動習慣、精神的危機からのリカバリーと就労支援など、多彩な領域の多岐にわたる研究が進められた。今後、教員の定年退職や新学科設立などにより、メンバーの入れ替わりがなされていくものと思われ、さらに幅広い研究領域に広がっていくことが予想される。地域協働研究教育センターが推進してきた地域志向・ともいき研究は、たん

に研究としてだけでなく、教育や社会貢献と連動させることを推奨してきているため、研究の推進は同時に教育や社会貢献の充実をも意味し、この10数年で地域との連携や本学の教育改革が進んできたことは間違いない。

そして、社会貢献であるが、京都文教大学は総合社会学部（総合社会学科・実践社会学科）、臨床心理学部（臨床心理学科）、こども教育学部（こども教育学科）の3学部からなり、それぞれの学部学科が得意とする社会貢献の内容と形がある。たとえば、総合社会学部では、商店街や自治会の活性化、宇治茶を通した町おこしなどがあり、臨床心理学部では、心理臨床センターや産業メンタルヘルス研究所を核とした子どもや大人の心理的サポートやケアがある。そして、こども教育学部では、地域の小学生の学習支援や、サードプレイスでのボランティア活動などがある。いずれも上記の教育・研究活動と絡めて、教職協働で展開してきたものばかりである。

末筆になるが、これらの活動を10年以上にわたって推進して来られたのには、フィールドリサーチオフィス（FRO）という事務局の存在が大きい。というか、FROなくしては、いかなる活動も成立しなかったであろう。そして今後も、地域の皆さまと、本学の学生・教員・FROが、ともに宇治・京都の地を盛り上げていくことができれば幸いである。ぜひご参加とご協力をお願いしたい。